# 巨人島からの手紙

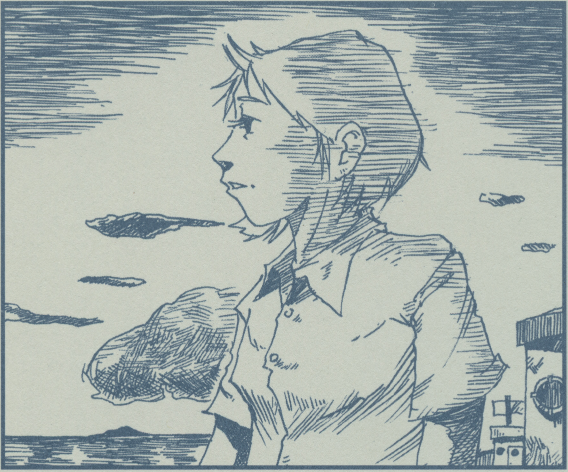
〜The Story about "DoShin the Giant"〜

連載第5回

作：DiscDriveTribe

## ヨシノブとタカコ姉さんは旅に出た！

## 巨人島にいるはずの兄さんを探しに……



世界中の様々な国からの研究者たちが集まる、ウォン海洋研究所は、近海で海底火山の活動観測が行うことができる施設で、いくつもの無人島が複雑に入り組んだ海域の洋上に人工的に造られた基地のような建造物でした。夏休みを利用し、カワカミ教授の紹介状を持ってヨシノブとタカコ姉さんは研究所を訪れました。

「ヒデキか？　ヤツはまったくクレイジーだったよ！　おっと、これは失礼！　君たちは彼を探しに来たのだったな！」ガルビーという陽気な青年が彼らを迎えてくれました。彼は、タカコ姉さんを見ると、こう言いました。「ヒュ〜！　マジック！　東洋の神秘！　これじゃヒデキもクレイジーになっちまうわけだ」

確かに、浅黒く日に焼けた肌の研究員たちのなかで、夕日に照らし出されたタカコ姉さんは透きとおるように見えました。





ヨシノブへ

荒れていた海流も静まり、俺はそろそろ海上に浮上してもいい頃だと判断した。驚いたことに、俺が数日前まで逗留していた島の姿は影も形もなくなっていた。本来島のあるべき場所には、もはや全身を一度で視界に収めることが不可能なほど巨大化した巨人が、立ちつくしていたのだった。

巨人は茫然自失とした様子だった。そして、ゆっくりと倒れていった。島から数キロは離れていたはずだが、その衝撃は凄まじく、俺は再び海中に潜行せざるをえなかった。

さらに数日が経過した後、俺は巨人が倒れた地点へと向かった。だが、そこに当然あるはずの巨人の骸はなかった。発見できたのは、今まで存在していなかった新しい島だった。

俺はその島に上陸した。上陸した俺が最初に遭遇したもの。それは、手に棍棒を持ち、顔にペインティングを施した原始人だった。彼は突然現れた俺の姿を見ると、腰をぬかして駆け去っていった。しかし、驚いたのはこちらのほうだ。数日前にできたばかりの島にすでに人がいるなんて！





「潜水艦の行方は継続して探している。すぐにでも捜索にでることができるが、どうする？」ガルビーがうってかわって真面目な声で言いました。

調査船はヒデキ兄さんが操縦していたと思われる潜水艦の発した信号の記録をたどり、海底の様子を探りながら慎重に航海をすすめていきました。何も発見することなく数日が経過した後、ガルビーが説明しました。

「ここを最後に、潜水艦の信号が途絶えたんだ。消えちまったのは信号だけじゃないがな。潜水艦ごと、影も形もなくなっちまったってわけさ……それはともかく……どうやら、この船も大変な事態に巻き込まれているようだな。天候がくずれはじめてきた。これ以上の航海は危険だ。それでも捜索を続けるというのなら俺は構わないが」

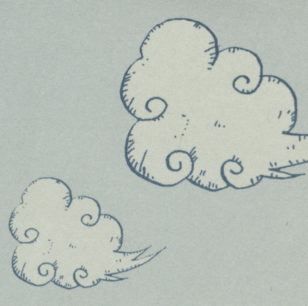
ガルビーがヨシノブの意志をたずねると、ヨシノブはタカコ姉さんの様子をうかがいました。タカコ姉さんは、決意を込めた表情でうなずいたのでした。

ガルビーの言葉通り数十分後、調査船は大変な嵐に巻き込まれていました。高波が船上までも襲い、何度も何度も恐ろしい力で舞い上がったかと思うと、海面に叩きつけられます。ヨシノブとタカコ姉さんが、船ごとバラバラになってしまうのではないかという恐怖に立ち向かえたのは、ただ、ヒデキ兄さんを想う気持ちがあったからでしょう。

どうして、兄さんは、こんなに素敵な人を置いていってしまったんだろう。どうして、兄さんは僕にだけ手紙をくれるんだろう？ 嵐の中で、あらためてこの疑問をヨシノブは考え続けました。その頃、ヨシノブの家にはヒデキ兄さんを探すために旅に出た彼らと入れ違いに、こんな手紙が届けられていました。









この島にはすでに、恐るべき速さの進化スピードで、他のどの地域とも異なる生態系や、文明のきざしまでもができあがっていたのだ。人々は集落をつくり、マンモスを狩ってきては、その牙を組み上げ高い高い塔をつくっている。どうやら、彼らはいつか太陽に手が届くものと思っているらしい。

## DDT通信 その5

11月号

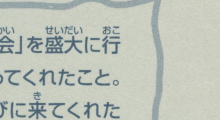
『巨人のドシン1』

ディレクター
**飯田和敏**

8月27日～29日まで幕張メッセで「『巨人のドシン1』初お披露目会」を盛大に行ないました。意外だったのは、小さな子どもたちがかなり関心をもってくれたこと。地面のアゲ、サゲを楽しんでいた模様です。3日間もぶっ続けで遊びに来てくれた子もいて、嬉しかったなぁ。

さて、ゲーム本体はもう既に完成しているので、今は部材（取り扱い説明書とか外箱のこと）の作成に取り掛かっています。12月1日にサービス開始（予定）ということで、はりきってます。が、「（予定）」が曲者。なんといっても逃げ水の様なハード、DDです。油断は禁物。しかし、これ以上遅れると困っちゃうんだよなぁ、マジで。初お披露目もすませちゃったしね。かっこつかないじゃん！ 頼みますよ！ ランドネットディディさん！ 僕を含めて64ユーザーはみんな期待しているのです！

個人的には『マリオアーティスト』が気に入りました。開発ツールとして使ってみたい。そうすれば僕ら（クリエイター）とユーザーの垣根が壊れて、だいぶイイ感じになるんじゃないかな。



チームDDT 原案・文／飯田和敏 構成・文／相良伸彦 画／山崎廉